

令和2年度第2回奈良市総合教育会議 会議録	
開催日時	令和2年11月12日(木) 午後2時から午後3時まで
開催場所	奈良市役所 中央棟地下1階 地下会議室
協議題	奈良市教育大綱について
出席者	構成員 仲川市長、北谷教育長、都築教育委員、畑中教育委員、柳澤教育委員、梅田教育委員
	事務局 【総合政策部】真銅総合政策部長、谷田総合政策課長 【教育部】立石部長、増田次長、廣岡次長、吉田教育監、山田教職員課長、伊東学校教育課長 【教育政策課】小林課長、五味原課長補佐、小林主任、岡田指導主事
開催形態	公開(傍聴人2名)
担当課	教育部 教育政策課、総合政策部 総合政策課
議 事 の 内 容	
仲川市長	<p>* 第1回の総合教育会議では、「どのような子どもを育てるのか」、「今後の教育における教師の役割」、「今後の子どもたちの学び方」という大きなテーマでご意見をいただいた。それらのご意見や定例教育委員会において教育振興基本計画策定に向けた委員の皆様のご協議内容を共有させていただいた。これらを踏まえた中で本日お示しする大綱(案)についてご意見をいただきたい。</p> <p>まずは、前半の概要について、事務局より説明した後皆様から意見を賜りたい。</p> <p style="text-align: center;"><u>教育政策課長：事務局説明</u></p>
仲川市長	<p>* 全体像として、目標があって、目指す子ども像があって、育成の柱を構成する具体的な施策がぶら下がっているような立て付けになっている。大枠の構成部分として、この形で整理しているが、このような方向性で良いのかご意見を伺いたい。いかがでしょうか。</p>
柳澤委員	<p>* 私は納得しているところですのでこれで良いと思う。人生100年時代、生涯学び続けるという観点から、「協働」というキーワードが大きな目標に掲げられていることは良いと思う。</p>
都築委員	<p>* SDGs という人類共通の大きな課題を見据えて、目指す子ども像や育成の柱というものを考えているので私もこれで結構かと思う。</p>
畑中委員	<p>* 目指す子ども像について、今後の社会を切り拓いていく子どもたちの力を考えた時に、「みずから」、「とことん」、「つながり」というのは全て「協働」という言葉に繋がっているのがいいと思う。</p>
梅田委員	<p>* 全体の構成については、教育大綱と教育振興基本計画の性格を見極めながら策定していく必要がある。また、市として教育を考えたときに柱3の内容を入れ込むこと</p>

は難しいが、切り離せない内容でもあることからその重要性も認識ができる全体の構成になっているのではないかと思っている。

北谷教育長

* 柱1, 2は学校で行う施策を表しており、それを支える土台となるものが前回の総合教育会議の中では示されていなかった。柱3がこれから求められる本当の子どもたちの力であり、柱3として位置づけたことで明確になったと思う。

仲川市長

* 大きなフレームワークとしては、皆さん大きな方向性は共有いただいたということで理解している。

* 今回のテーマである非認知能力の扱いをどのような位置付けにするのかについて、学力を身に付けさせることや、発達支援等の多様な学びをどう保証するかということに加えて、柱3として位置付けをしています。この部分について、イメージとしてフィットするかどうかも含めてご意見を伺いたい。

柳澤委員

* 保護者や市民にとって、非認知能力という表現がすこし分かりづらい気がする。

* 学校のベースとなっている学力と中長期的な人間性の育成が学校の中でどのように子どもと共有し協働して培っていくことができるかは教員にとってなかなか難しい課題だろうと思う。具体的な取組が例示されているので保護者や教員にも伝わるかと思うが、それを分かりやすく文章にできればなお良いと思う。ただ、最終的にこれで落ち着いても構わない。

仲川市長

* 非認知能力という表現が皆さんにご理解いただき浸透しないと意味がないという指摘と、柱3は学校の中だけで担える部分は限定されないのではないかとのご指摘でした。

都築委員

* 非認知能力という表現は受け手により捉え方が変わってくるので、奈良市が考える非認知能力はなにかという説明が必要かと思う。

* 新しい時代を迎え、モノも情報もふんだんにある中から自分が何を得られるのか、自分自身ですべきことを見つけ、自分がしたいことを見つけるという力は子どもたちにとって非常に大事だと思う。

* 先日、自主性と主体性ということについてお話を聞いたが、自主性とはやるべきことが明確であり、その行動を人に言われる前に率先して自ら行うこと。これは今までの学校教育の活動の中で行ってきたことかと思う。一方で主体性とは、何をやるのか決まっていない状況でも自分で考えて判断して行動すること。今、求められているのはこの主体性かと思う。自分が目的を見出してそれを生かすために何をするか自分で考えて失敗するリスクも背負って行うことは学校教育だけでは担いきれないと思う。

* 非認知能力は生まれてからの積み重ねや、どういう人と関わるかによって身に付いていく力であるから地域社会、社会全体にそういった学びの場が必要だと感じる。非認知能力というのは個別差があり、違いがあると思う。そうすると学校だけでな

く、家庭、地域が一緒になって学力以外に何が必要なのか協働的に考え、共有して、まずは地域で子どもを育てる。コミュニティスクールが担う役割というのはそういうところにあると思う。わくわくし自分が好きなことを見つけるということは、主体的に学ぶことの原点かと思う。地域も社会も教育のそういった場であってほしい。

仲川市長

* 学校外にそういった環境を保障していく時に、行政というフレームだけで考えるのではなく、地域社会を取り巻くステークホルダが協働するという可能性や重要性という事について指摘いただいたかと思う。また、地域社会側もその交流を通して地域社会の場を成熟していくというフィードバックもあるのかなと思う。このことについては教育大綱を踏まえたアクションプラン、実行計画を作っていく中では、具体策について深く議論していく必要もあるかと思う。

畑中委員

* 新しい時代を迎える中で、この非認知能力、基礎的な人間力というのは未来を生きていく力の土台であると思う。勉強ができてコミュニケーション力が低いと社会で活躍する場面が少なかったり、学校を出ると学力以外の能力が圧倒的に大切だと感じている保護者は多いと思う。その反面、学校のテストでよりよい成績を取らせることが大事だという価値観が根づいていることも確かである。学力テストでは測れない非認知能力は人生を生きていく上で大事なこと。

* 部活動指導者からの話では、指示待ちの子どもが多いと良く聞く。自分の人生を切り拓いていく子どもたちのためにも非認知能力の必要性を再認識し、それを育む教育を充実させるために柱3として位置づけたことは大事だと思う。この能力を培う場は学校だけだという認識ではなく、家庭においても育まれていることも理解いただき家庭教育の大事さも認識してほしい。多様な大人と関わる教育は大事であり、大人も子どもと一緒に学ぶ場の一つになる。

梅田委員

* 柱3に非認知能力という形で表すことは、表すことの難しさ、それを具体化することの難しさはあると分かりつつも、欠かすことはできないと思う。

* 非認知能力については研究が進んでいて、その人の資質や性格、人間性そのものだという言われ方もするが、非常に重要で幼い時に身に付けておくことで、生涯に渡って影響を及ぼすという因果関係があると研究結果からも明らかになっている。幼少期にまず身に付けておくことが必要な非認知能力は、自制心とやり抜く力と言われており私自身もそうだと思う。自制心は生活のベースになるもので鍛えられるもの。やり抜く力、つまりGRITは、遠い先にあるゴールに向けて興味を失わずに努力し続ける気質のこと。そのことが強い人はゴールに向かう意欲が培われており、高い成果を上げていく。多少のことでは諦めずやり抜いていくのだと思う。学校教育の中では、教科の学習を縦軸で表すとすれば、非認知能力は横軸として学校生活全てに関わっているものだと考える。

* 部活動を取り組んできた子どもの話の中で、「部活の時間は何事にも前向きに取り組み、諦めない姿勢を培うことができる有意義な時間であった。部活で学んだことは部活を引退して本格的に受験勉強を始めるようになってもすごく役に立った。最後

まであきらめないという気持ちは、部活や勉強だけではなく様々な場面で大切にしている。」また、「部活を通じて非常に多くのことを学び成長することができた。毎日の練習により体力や忍耐力が付き、それらの力は受験勉強にとっても役に立った。」これらはスキルではなくやり終えた時にできる言葉であり、この力に繋がるのだと思う。

- * よく世界を動かすような輝く生徒を育てるにはどうしたらいいのかという議論もあるが、最初は型にはめないといけないこともあると思う。破るためのベースを作ることが必要。小学校の時にあいさつや礼儀といった非認知能力に繋がる力を教えて身に付け、一人一人に基礎基本の学び方を身に付けていった上で、常識的な枠組みにはまっていくことが必要だと思う。本当の意味での学ぶ習慣が身に付き考える力が養われていくと思う。疑問のまま残さずに自分の腑に落ちるまで考え続けられることが大事であり、そのことが世界を動かすような力を持つようになると思っている。

北谷教育長

- * 非認知能力は、1996年に文科省が「生きる力」、2006年に経産省が「社会人基礎力」、2011年に文科省が「基礎的・汎用的能力」と、いろんな言葉で非認知能力を表している。教育界にとっては初めての言葉ではなく、学習指導要領でもずっと原点が書かれているように思う。
- * 私が現場にいた時も、部活動を通じて「粘り強く目標に向かって最後までがんばれ」と伝えたことが、結局、学習、学力に上手く結び付けられなかったということが少しあるだろうと思う。粘り強さや頑張りというのは、性格ではなく、しっかりスキルによって伸ばしていけるものだとされているので、教員がうまく授業の中でコーチングしていくのが求められる教育の主要だと思う。既に取り組んできたことをどう具現化していくかだと思う。

仲川市長

- * 皆さん大きな方向性は非常に近いものがあると思う。部活動というのが単なるスポーツトレーニングだけではなく、学習に繋がる重要な資質を身に付ける行為であり有益とは思いますが、部活動を選択しない子どもにとっては、どういうシーンでその力を獲得できるのか教えていただきたい。

梅田委員

- * 小学生であれば学校の行事や宿泊学習でその場面があると思うが、普通の教科学習も含め、そういった行事を使って獲得していくことが大変大きいと思う。目標を提示してそこに向かっていった自分たちを振り返った時に、どう思うのかということを経験し、中高に進学すると学校のなかで収まらない場に出て挑戦していくようになる。最近では、探究学習の一環で大学生とコラボして課題解決にむけた学習を外部の人とも関わりながら学習する場も設けられている。

仲川市長

- * そういった場やチャンスは多くあるのですか。

梅田委員	* はい。
柳澤委員	<p>* 部活動で培われる人間的な力、逆に言うと教科の学習の中では培えられない力ということが論点かと思うが、分からなかったことが分かるようになったという変容するプロセス、また、教師も分かるし子どもたちも学んで高まったということが分かる部分も人間力が深まったという捉え方ができるのではないかと思う。</p> <p>* 成功例を体験していくことは概ねそれでいいかと思うが、挫折やつまずきをどうフォローするのも教師の役割として求められ、そういった個々の子どもたちの学びのプロセスを教師が把握することが結果として積極的な学習支援になっているのではないかと思う。</p>
仲川市長	* 学習の中で非認知能力を培うことができれば、教師冥利に尽きるということかと思います。多様な場面で相対的に獲得していったらいいということですかね。
都築委員	* 学校外での学びというと、奈良市の「子ども会議」や、生涯学習財団の「子ども奈良シティ」等、社会に参画していく体験を通して見えてくるものを学び、大人との関わりの中で学ぶ達成感を感じることもある。学校ではできないが、外に出るとできる子もいる例として、不登校の子が学校には行けないけど、違う場でそういう体験をして自分の力にすることもあると思う。基本は学校での学びになるが、様々な体験から新たに知ることを学校に持ち帰ることもあると思う。
仲川市長	* これはまさに柱2の多様な学びを支える、保障するところにも繋がると思う。学校の中ではなかなかフィットしない子どもも多い時代だと思うので、地域や企業も活用しながら、行政としても第二の学びの選択肢をどうチャンスメイクしていくことも必要かと思う。そのことについては、通級指導教室の鼓阪北幼稚園跡地に展開することも新しい形のフリースクールになることも一つの可能性かと思う。柱3が独立するというよりも柱1, 2にも横串として刺さるのかと思う。
畑中委員	<p>* 放課後の時間を有意義に使えないかと思う。粘り強く取り組む力は非常に大事であると思うが、自分が夢中になれることがあってのことだと思うので、子ども自身が見つけられる機会というのはすごく大事になってくる。</p> <p>* 部活動指導者は競技のレベルを上げるだけでなく、指示待ちの子どもを自分から課題を見付け皆を引っ張っていくリーダーシップを育てることに重きを置いており、これは部活動の意義だと思う。</p> <p>* 都祁小学校を訪問した際、教科で学んだことが子どもたちのプレゼンの中にも生かされているが、どこか学校モードではない子どもたちが自ら学んでいく、近い大人と接していることが感じられて、そういった機会は学校の中でも大事である。</p>
仲川市長	* 部活動以外の意味で放課後をもっとうまく活用できないかというところがポイントかと思うが、子どもの行動範囲や安全の問題もあるが、アイデアがあれば我々も考

えていきたい。同じ学校の敷地内であってもモードが変わると立ち位置や見え方も変わってくるのですごくいいなと思うが、校庭開放や学校施設の地域開放はなかなか進み切らない。学校と一緒にやっている放課後子ども教室であれば広げやすいかと思うが、それ以外の人が入りづらいかな。どうですか。

都築委員

* 鳥見小学校では、地域スポーツの指導者が企画をして自分たちのチームではない子どもたちに対して指導していることもある。地域にいる先生を巻き込んで、学校の教育理念を共有しつつ、放課後を活用することは実際ある。

仲川市長

* コミュニティスクール等の役割を高めていくことが突破口かもしれない。地域によって取組差があると思う。
* また、今日の議題としては、今日的な教育課題としてこういった部分も必要ではないかということがあれば教育大綱の中に触れていく必要もあると思う。今、GIGA スクールやコロナ対策等、今までの学校の様子と大きく変わってきているが、いかがでしょうか。

梅田委員

* 非認知能力を教科の学習を繰り返し行う中でそれはできると思っている。目に見えない非認知能力を学校の中で育てることについて、学校の中でよく言われてきていることは、「教えるのではなくて学ぶ」。そのためには環境とカリキュラムを位置づけていく必要があることは大きな課題である。
* 教育大綱の中でも触れられているが、社会の変化のスピードが非常に早く、今後どうなるかわからない人生 100 年時代を生きていく子どもたちは今日の前にいることから、働き学び続けることは次のステージに進むための子どもたちの土台を作っていくことが学校教育の段階では必要である。そのために、自分の頭でしっかり考え人とは違うアイデアを培っていくことが大切で、このことは教育の役割の一つではないかと思う。それこそ世界に通用する子どもを育てる奈良市の教育だと言えるようにもなればいいなと思う。

仲川市長

* 教員の養成や、カリキュラムの策定については柱3をどう位置付けしていくかが伴わないと教育委員会の手持ちになってしまうが、学習指導要領との整合性はどうなっているのか。

梅田委員

* そこが柱3の中にある主な取組の学び方である PBL 教育の推進や Arts-STEM 教育の推進について考えていく必要があるのではないかと思う。

仲川市長

* 最新の学習指導要領の中には、PBL の手法といったものが明確に位置づけされていて、このことを奈良市独自のカリキュラムとして策定しなくても実現できるということでもいいのでしょうか。

北谷教育長

* PBL や GRIT といった言葉は出ていないが、「自ら学ぶ」といったことは明記されてい

るので、学習指導要領と離れたものではなく奈良市として深めていくことも可能である。

畑中委員

* 社会がこれだけ多様化しているのに、教育は多様化していないという話を保護者間で聞いたことがある。私たちの価値観や経験だけでは子どもたちに伝えることができないという話をされていた。今後、子ども達が学びたいという気持ちを邪魔しない環境づくりも必要になり、それがフリースクールになるか分からないが、そういった存在が必要だと思う。学校でできることを見直すことと併せて、教員だけでなく地域や保護者の大人が果たす役割は大きいと思う。

仲川市長

* 大人自身が方向性を見失い、自分の成功体験が乏しい保護者がおられるということが子どもの能力の限界にして良いのかということはあるかと思う。このことはまさに教えるというより学ぶことに繋がると思う。

都築委員

* 一人1台タブレット端末が支給され、そのことについて子どもがテレビでインタビューを受けている様子があった。子どもは、「字を書かなくていいから楽になった」と答えていた。確かにそういった時代が到来するだろうが、私たちは字を書く営みを通じて身に付け、思いついたりする深い文化がある。人類の長い歴史の中で築かれてきた英知というものをなくしていないか考えたい。伝統や文化に支えられてアイデンティティとしてそこにいられること、奈良の教育でしっかり考えないといけないと感じている。大人が見極め、伝統文化を受け継いでいく必要がある。

仲川市長

* 教育の出口を18歳にするのか、15歳にするのか、22歳にするのか、生涯に渡って出口を位置づける意味では、教育の存在の時間軸が変わってくる。より豊かに生きるための手段として学びをどう活用するのか、学びのための学びではないということは大事な視点であると思う。

柳澤委員

* 奈良市として、5年以内にGIGAスクール構想を向き合うシステム、力量を付けていただきたい。これまでの戦後の教育からステージが変わることになる。次のステージになった後に、伝統や文化に支えられた教育に戻すということ。つまりGIGAスクール教育をやろうとしている時に、もう一つ同時進行で行うのはきついのではないか。GIGAスクールで奈良ブランドと言われるくらいまで積極的に行う。その時は、古い教育は行わないということではない。ICT教育と学校との関わり、地域との関わりをどう組み込んでいくのか、柱1にも「ICTを活用した個別最適化された学びの実現」と明記されているが、それ以外の言い方で、ICTが家庭も地域も入っていないのか気になる場所である。

仲川市長

* ここ難しい議論だと思う。それこそ書くという動作によって脳に刺激がいくこともあるだろうし、文化としてもあるだろうし、逆に墨をすらなくていいのかという話にもなる。何を残して、何を变えるのかが難しい。教育の議論になると、漏れがな

いかと求められ考えてしまう。教育の手法、手段が膨張したことで学校現場が疲弊することにもなる。本来の目指すべき方向が、手段と目的がテレコになることもあるので、いくつか絞り込んだ目標や方法論に特化して突き抜けていくというご意見もなるほどと感じた。

北谷教育長

* 非認知能力も含めて先の見えない困難な時代をどう生きていくのかということは、知識だけでなく、粘り強く挑戦していくような総合力のある子どもを育てていかなければならない。そのことが、言葉や伝統、ICT教育、データ活用等の「道具」を使い、他者と価値観の違う人とコミュニケーションが取れて、自分の意見が言え、自己決定できる総合的な能力がある子どもを育てていくことに視点をあてて、中長期的な部分をカリキュラムで表していければと考えている。

仲川市長

* 包括的な視点を持ちながらも、方法論やビジョンについては特化して示すということも一定必要かと思う。その中で今日的な課題や受け手側の保護者や周りを支える方の考え方や意識も含めて総合的な取組で教育は成り立っているかと思うので、引き続き総合教育会議を行い、ご意見いただければと思う。